



Celebration



【9月3日】
イスラエル経済産業大臣来訪記念レセプションにてギラッド・コーヘン駐日大使（右）と松澤聡FEC常務理事



【9月5日】
インド大使送別会にてシビ・ジョージ駐日大使（右）と松澤建FEC理事長



【9月11日】
ベトナム建国80年記念レセプションにてファム・クアン・ヒエウ駐日大使（左）と松澤理事長



【9月16日】
第60回シンガポール・ナショナルデー・レセプションにてオン・エンチュアン駐日大使夫妻（左）と松澤理事長



【9月18日】
チリ独立215周年記念レセプションにてリカルド・ロハス駐日大使（右）と小方俊也FEC専務理事



【9月24日】
トルクメニスタン永世中立30周年記念レセプションにてアタドゥルディ・バイラモフ駐日大使夫妻（左）と小方専務理事

ベトナム訪問団 今後とも継続したい

ファム・クアン・ヒエウ駐日ベトナム大使主催の感謝夕食会



民間外交推進協会（FEC）は9月22日、ファム・クアン・ヒエウ駐日ベトナム大使に招待いただき、ベトナム大使館にて開催された感謝夕食会に出席した。夕食会には、ベトナム側からヒエウ大使のほかブー・ニャット・ハー投資部長ら各部門の担当官10人、FEC側からは松澤理事長ら16人が出席した。

冒頭、ヒエウ大使から「FECは、長年にわたり日越関係のため多くの貢献をしてくださっており、日頃から深く感謝している。両国関係を人間の身体に例えれば、民間外交は心臓である。そして経済界の方々は血管であり、循環を担う重要かつ必要不可欠な存在である。これまでFECはベトナム訪問団を定期的に派遣しているが、今後も継続的に実施していただきたい。本日出席している各部局長をはじめ、われわれベトナム大使館は全面的にサポートする所存である」と歓迎の挨拶があった。

続いて松澤理事長は「本日はこのような温かいおもてなしを賜り、ありがたく思う。先程の大使閣下のご挨拶を拝聴し、嬉しく思うとともに改めて両国の絆の強さを実感した。皆様ご存知のとおり、ヒエウ大使は大変熱心に職務にあたっておられ、われわれ一同は厚い信頼を寄せている。必ず本年度または来年度中にFEC訪問団の派遣を実現することを約束する」と述べ



た。
その後は、出席者が自己紹介を行い、ベトナム大使館から振る舞われたベトナム料理をいただきながら、

和やかな雰囲気の中で交流を深めた。経済協力の可能性や人材交流など様々な意見交換が行われ、今後の両国間の更なる協力深化が期待された。

学生時代の挑戦 今に生きる経験

FECは8月26日、2013年から19年までの7年間にFECと学生団体「GNLF」を中心に実施された「FEC×GNLF合同イベント」の初期メンバーを招き、座談会を開催した。出席者は向山直佑氏（東京大学准教授）、安東慶太氏（立教大学助教）、市原拓也氏（株式会社ジャムコ執行役員付部長）、片岸雅啓氏（経済産業省秘書課課長補佐）の4名。司会はFEC専務理事の小方俊也が務めた。



東京大学未来ビジョン研究センター
准教授

向山直佑氏

2015年東京大学法学部卒業、17年東京大学大学院法学政治学研究科総合法政専攻修士課程修了、21年オックスフォード大学政治国際関係学部博士課程修了



立教大学社会情報教育研究センター
助教

安東慶太氏

2015年東京大学教養学部卒業、17年東京大学大学院総合文化研究科修士課程修了、24年同研究科博士課程修了



(株)ジャムコ改革推進部執行役員付部長

市原拓也氏

2016年東京大学工学部卒業、18年東京大学大学院工学系研究科修士課程修了



経済産業省大臣官房秘書課課長補佐

片岸雅啓氏

2017年東京大学法学部卒業。同年経済産業省入省し、エネルギー・人材政策に従事した後、7月より現職

GNLFの創設の目的、 主な活動

司会（小方専務理事） 本日はお集まりいただきありがとうございます。皆さんが学生時代に参画したインターカレッジの交際交流団体Global Next Leaders Forum（GNLF）では、年に一度、日本と海外の次世代のリーダーたちとする大学生が一堂に会する「本会議」を開催してきましたが、その活動についてお話を聞かせてください。

向山直佑氏 GNLFは設立当初から他の学生団体との差別化を強く意識していました。当時、欧米や中国などとの交流を行う団体は多くありましたが、GNLFはチュニジア、エジプト、ブルガリア、ブラジル、インドなど新しい地域との交流構築に力を注いでいました。私が参加を決めたのも、そのユニークな視点に惹かれたからです。活動は刺激的でしたが、理想だけでは越えられない現実にも直面しました。2012年のチュニジア会議では、現地学生とのコミュニケーションがうまくいかず準備が難航し、資金も確保できないなど多くの課題に直面。理念だけでは物事は動かず、日本の常識が通じない現実を痛感しました。また、参加費を取らず協賛金で運営する方針だったため、資金集めの難しさも学びました。

司会 コーディネーターを介さず現地と直接やり取りしていたのはすごいですね。

向山 当時は現地の大学教授に直接メールを送っていました。今思えば、いきなりの連絡は怪しかったでしょうね（笑）。

司会 資金調達まで行っていたのは立派です。

安東慶太氏 私は渉外を担当し、対象国を戦略的に選び、大使館や大学などとのルートで接触するかを考えました。大変でしたが、その中で協賛してくださる企業にも出会いました。

司会 協賛企業は先輩などの伝手を頼ったのですか？

安東 ほとんど飛び込みで、反応のない企業も多かった一方、商社など私どもの活動に賛同してくれる企業とも繋がることができました。

向山 国際交流基金の支援を得られたことが大きかったですね。最近、当時の担当者と再会し懐かしく思いました。個人にも協賛をお願いしており、学生ながら厚かましかったですが、若さゆえの挑戦でした。

司会 そうした学生時代の経験の有無は社会に出てからも大きな財産となりますね。

市原拓也氏 私も協賛依頼を担当し、「誰が関心を持つか」を常に考えていました。英語教育企業や商社、コンサルなどに「報告会に参加すればメリットがある」と説明していました。私の年はブルガリア開催で、JICA施設を活用しながら現地でも1週間のプログラムを準備。

現地学生や教授の協力で、学生募集や学校関係者の巻き込みも実現できました。

片岸雅啓氏 私の時はブルガリアと広島で本会議を開催しました。戦後70年という節目の年に広島開催を実現し、今年（2025年）の戦後80年を迎えるにあたり、当時を思い出します。印象的だったのは、国によって「平和」への認識がまったく異なることでした。後にウクライナ戦争が起きたことであの時に感じた違いの意味をより深く理解するようになりました。今も当時の参加者がSNSでウクライナやガザの話題を発信しており、あの会議を開催して良かったと心から思います。

FECとのイベントの きっかけと意義

松沢聡FEC専務理事 GNLFの皆さんとイベントを共催するきっかけは、チュニジア大使館で向山さんと出会い我々が皆さんの方向性に共感したことでした。学生が参加しやすいよう土曜に開催し、後日FECで打ち合わせを行い、会議はJICAを利用するなどの工夫をしました。学生が参加しやすいよう土曜日にJICAで開催しました。講師のアレンジをFECが行い運営は学生主体で進めることになりました。

市原 初年度は「日本を考えるシリーズ」をテーマに掲げ、毎回領域ごとに内容を設定しました。

司会 「本会議」でお忙しい中、FECとのイベントと一緒にやってくださったことを嬉しく思います。日中学生会議や京論壇、MPJ Youthなど他団体も巻き込んでいただけたことでイベントの広がりができました。最近MPJ Youthの学生がFECのイベントに参加し懐かしく感じました。

向山 今振り返ると、FECが学生の無理な要望を寛大に受け入れてくださっていたと感じます。当時はFEC側のご負担やメリットまで考える余裕がありませんでしたが、改めて感謝しています。特に「講師と直接議論したい」との要望

に対し、松澤理事長が「学生が議論を求めるのは当然」と言ってくださったことが強く印象に残っています。

司会 学生が議論を求める姿勢は志の高さの表れです。年齢を重ねると考えが固定化しがちですが、皆さんとの交流は私たちにとっても大きな刺激になります。

FECイベントが その後に与えた影響

司会 学生時代のFECイベントが、その後の仕事や人生にどのような影響を与えましたか。

市原 イベントは私にとって転機でした。理系の私にとって社会的テーマに触れる機会は少なく、エネルギー問題に関心を持ったのがきっかけで、研究室での活動やUNIDOでのインターン、さらに就職後のエネルギー関連プロジェクトへとつながりました。多様なテーマに触れ、自分の興味の方向性を見出せ貴重な経験でした。

安東 FECの特徴は、他の学生団体や第一線の方々との交流できることです。同じテーマでも多様な考えがあり、それを受け止める大切さを学びました。社会に出てからも、多角的な視点で議論する重要性を強く感じています。FECを通じて視野を広げられたことは、今の自分に確実に生きています。

司会 今、安東さんのご専門は？

安東 日本の歴史社会学を専門にしており、歴史認識や政治思想を研究しています。FECでの経験は研究の視点を養う上でも大きな影響を与えています。

司会 向山さんのご専門は？

向山 政治学・国際関係論の研究をしています。特に植民地からの独立過程で石油が果たした役割をテーマとしています。GNLFでの活動と今の研究は重なりあう部分も多く、当時交流してきた国々が今では「グローバルサウス」として注目されており、当時の経験が研究やイベント運営にも大いに役立っています。



第1回FEC×GNLF合同イベント＝2013年

さまざまな交流 視野が広がった

社会に出て気づいた 日本と世界の「リアル」

司会 大変興味深い研究ですね。いずれFECで向山さんに講演していただければ嬉しいです。GNLFの活動を通じ、学生時代と今で何が変わりましたか。

向山 チュニジアでの交流や留学を通じて感じたのは、「自分たちの常識は通用しない」という現実です。文化や価値観の違いから理解し合えないことも多く、現実的な距離感の重要性を学びました。一方、オックスフォード留学では多くの留学生が似たような社会経済的バックグラウンドを共有しており、価値観の差は意外に小さいと感じました。将来リーダーとなる層は国境を越えて似た感覚を共有している一方、それ以外の層とのギャップは顕著でした。

司会 欧米での価値観共有が社会全体に通じない「ズレ」を感じたことは？

安東 あります。海外の人と話す中で国の違いはありますが、同じ職業・立場なら考え方は近い。国籍よりも職業やコミュニティが影響する面が大きく、「差異」そのものの捉え方が変化してきたと感じます。

司会 市原さん、コンサル業界では国を越えて共通言語で議論できますが、文化の違いは？

市原 多く感じました。インド・パンガロールに駐在し、現地10人ほどのチームと働きました。家族ぐるみの合宿のような社内行事があったり、決定事項が覆ったりと文化や価値観の違いを感じました。議論の進め方や人間関係の作り方など、日本との違いを肌で感じました。

司会 安東さんもコンサルティング業界にいらっしゃいましたね。

安東 主に国内勤務でしたが、海外クライアントとの短期プロジェクトでは大きな差は感じませんでした。ただ関係が深まるほど、個々の文化的背景が仕事の進め方に影響していると気づきました。外資系という環境の特性も大きいと思います。

司会 片岸さんは現在、経産省で人事をご担当されていますが、以前はどんなお仕事を？

片岸 以前はエネルギー・環境分野の政策に携わっていました。国際交渉の場に立つことはまだありませんが、「国際

益」と「国益」のどちらを優先するかという局面では、やはり国益を選ばざるを得ません。ただ、他国の立場や背景を理解しなければ真の交渉や協調はできません。一つの動きの裏には歴史的経緯や政治的文脈があり、政府・産業界・省庁など立場によって考えが異なります。その差異をどう橋渡しするか、常に頭を使う仕事でした。

司会 社会人として経験を積んだ今、当時のFECフォーラムを振り返って感じ方に変化はありますか？

片岸 ブルガリアを訪れた際、「GDPが青森県と同程度」と知り、この規模で国家がどう成り立っているのか強い関心を持ちました。その問いは今も残り、国の持続性を考えるきっかけになりました。今振り返ってみると当時より視野が広がったと感じます。仕事では全体を俯瞰する「マクロ」と個別の課題を見る「ミクロ」の両方が求められます。FECフォーラムを通じて、その両面の視点を鍛えられたと思います。

安東 GNLFでは各国の学生同士の交流を通じ、学生という軸の視点が中心でしたが、FECでは実社会の第一線で活躍する方々の話を伺い、「視点がストレッチされる」感覚がありました。今では会社や役職という立場を意識する機会も増え、当時の経験が確実に生きています。

向山 当時は「日本をどうするべきか」と強く意識していましたが、今は国という単位から少し距離を置いています。実体のない「国」という概念が「日本人としてどうするか」という意識を生む。この「国の存在感、自体に学問的関心を持つようになりました。改めて振り返ると、あの頃の自分が「日本の未来」を真剣に考えていたことが今は新鮮に感じます。

市原 海外は想像以上に身近で影響力が大きいと感じます。ロシア・ウクライナ戦争も当初は遠い出来事のように思いましたが、天然ガス輸入や半導体生産への影響を通じて、日本の生活とも密接につながっていることを実感しました。ブルガリア本会議で議論した「経済格差」も、今ではフィリピンの工場労働者が東欧へ移住するなど、現実の課題として目の前に現れています。

司会 当時、日本は「失われた10年」が「20年」に延び、少子化や国力低下へ



(左上から時計回りに) 向山氏、安東氏、市原氏、片岸氏

の懸念が強まっていました。現在は「失われた30年」とも言われ、外国人受け入れなどの課題も顕在化しています。そうした視点で、今後の日本をどう見ているか？

片岸 日本は自動車や産業機械で約28兆円を稼ぐ一方、ほぼ同額を化石燃料の輸入に充てています。このアンバランスさに危機感を覚えています。国際情勢が激動化する中で、日本として「どう稼ぐか」「稼ぎ方をどうデザインし、システム化するか」を真剣に考える必要があります。産業構造の再設計こそが喫緊の課題です。

司会 エネルギー分野では、どのあたりに可能性を感じますか？

片岸 再生可能エネルギーは注目されていますが、日本は国土が狭く可住面積も限られています。したがって、現実的には原子力を理解を得ながら一定程度活用せざるを得ないと考えています。

司会 「衰退していく先進国」と語られがちな日本ですが、「新たに創り、再び発展する」という発想も重要ですね。

向山 人口減少、エネルギー、気候変動はいずれも長期的課題で、今からの対策では遅い面もあります。若い世代には将来を悲観的に見る人が多く、それは「失われた30年」を生きてきた世代特有の感覚かもしれません。短期的には外国人労働者の受け入れが必要であり、気候変動対策には革新的技術への投資が欠か

せません。対応ができなければ、ある程度の経済成長を諦め、「脱成長」という選択肢も考える必要があるでしょう。学問的に見れば、過去200年の成長こそ例外であり、今後は人口減少が世界的潮流になる可能性もあります。

片岸 私はあまり悲観的に物事を見ていません。人口減少は避けられませんが、大切なのは「数」ではなく「中身」や「質」です。気候変動や人口問題はすぐに解決できませんが、現実を受け止め、どうアプローチし続けるかを考え続けることが重要だと感じています。

向山 私も一定の楽観主義を持っています。歴史的にも、大きな危機感が社会を変えるブレイクスルーを生んできました。気候変動についても、今はまだ本当の意味で「追い込まれていない」、段階であり、これからが正念場だと思います。

市原 片岸さんの「日本は産業構造の再設計が必要」という指摘は的を射ています。高度成長期からバブル期にかけて、購買力のある国民を背景に多くの企業が成立していたのは、当時の「余裕」の象徴でした。今後は統廃合が進み、より効率的な産業構造へ再編されていくでしょう。インフラや街の美しさもその時代の遺産です。漫画やアニメなど、当時育まれた文化産業には今も大きな可能性があり、そこにリソースを注ぐことで再び発展できるのではないかと感じます。

安東 私もそれほど悲観していません。研究者として一歩引いて見ると、「失われた30年」という価値観自体がどこから生まれたのかを考えます。経済成長を基準とした比較が本当に全員に共有されていたのか疑問です。この言葉が説得力を持ち続ける社会状況がある一方で、その背景にある価値観の形成過程にも目を向ける必要があります。主観的な幸福感の観点から見れば、価値観の相対化はむしろ重要であり、それを可能にする柔軟さこそ先進国の在り方の一つだと思います。歴史的背景から多角的にこうした視点を探ることに、私は面白さを感じます。

4面に続く



GNLF当時の座談会参加者ら—2013年

GNLF

Global Next Leaders Forumの略。2010年度設立。11年9月、第1回本会議開催。東京大学の学生が中心となって運営する国際交流・リーダーシップ育成を目的とした学生団体。毎年、世界各国の学生を招待し、グローバルな課題について議論するカンファレンスを開催している。本団体の活動を通じて、異なるバックグラウンドを持つ学生同士が意見を交わし、新たな視点を獲得の機会を提供している。

理念：将来の世界を担う可能性と意思を持つ大学生が一堂に会する国際会議を「起点」として、数年～数十年の長きにわたりプログラムへ関与することを通じて一人ひとりがグローバル・リーダーへと自律的に成長できるような場を、そして彼らが人間的な絆を深めてゆくことのできるような場を創造する。

好奇心持って 全力でチャレンジを

3面から続く

次の10年に向けて、 何を考えていく？

司会 これからの10年をどのように描いていますか？

向山 研究者として今後も研究を続けるつもりですが、10年後どこにいるかは分かりません。これまでの10年は訓練と研究に集中してきましたが、今後は社会の側から「研究の知見を生かしてほしい」という声もあり、社会とつながる仕事にも関わっていきたいです。母校に戻り、学生やGNLFのような団体とも関わる機会が増えました。教育を通じて次世代の育成に関わっていきたいと考えています。

安東 私は実務と研究の間を行き来しており、将来的に研究者として進むかはまだ未定です。ただ、両者をハイブリッドに両立させる可能性を模索しています。明確な道筋はまだ見えていませんが、新しい形で挑戦していきたいと思っています。

片岸 私のキャリアの軸は「この国をどう成り立たせていくか」という問いです。これからの10年もその視点を持ち続け、考え、行動していきます。

市原 今後もしばらくは、ものづくりや製造業に関わりたと思っています。自分の力が最も発揮できるのは、一定規模の企業の中だと思っています。製造業は関わる人が多く、自分の仕事を通じて業績を上げ、その成果が周囲の幸せにつながるようなポジションで頑張っていきたいです。

今の学生へのメッセージ

司会 最後に、今の学生や若い世代に向けて、皆さんからメッセージをいただけますか？



(左から) 松沢、向山氏、市原氏、安東氏、片岸氏、小方

向山 まずは、しっかり勉強をしてほしいなと思います。社会に出てから知識をアップデートするのは、思っている以上に難しいです。学生のうちに、ある程度の「基礎体力」をつけておかないと、後々苦労する場面が出てくると思います。今は変化の激しい時代で、5年前に正しかったことが、5年後には通用しないこともあります。そんな中でも、本質的な知識や思考力は必ず役に立ちます。表面が変わっても応用できるような、土台となる力を、ぜひ学生時代に身につけてください。

安東 教員として学生と接する中で、将来や就職活動に対して不安を抱えている方がとても多いと感じています。でも、実際に社会に出てみると、「意外とみんな優しい」「意外と受け入れてくれ

る」……そんなこともたくさんあります。悩むことは大事ですが、悩みすぎて立ち止まる必要はありません。思っているよりも、社会は心の広い人が多いです。相手に敬意を持ちつつ、自分らしくぶつかっていく姿勢が、きっと道を開いてくれると思います。

片岸 社会に出たばかりの頃や学生時代は、無理をすることや挑戦することによって不安を感じるかもしれません。でも、たとえ失敗しても、命を落とすわけではありません。ぜひ思い切ってチャレンジしてみてください。また、「好奇心」を持つことはとても大切です。知らないことが多いと、人生の選択肢はどうしても狭くなってしまいます。でも、好奇心を持ってさまざまなものに触れていくと、思いがけないところにヒントが見つかるこ

ともあります。学びに対する姿勢を大切にしてください。

市原 「そのとき一番良いと思ったこと」を信じて、まずはやってみてください。私自身、7年前にコンサル会社に入った時点では、まさか今の会社に転職するとは思っていませんでした。でも、今では「この会社に入って本当に良かった」と心から思っています。将来を深く、長期的に考えることも大事ですが、あまりに慎重になりすぎなくても大丈夫です。目の前のことに全力で取り組んでいけば、少しずつでも道はつながっていくものです。

司会 本日はお忙しい中、本当にありがとうございました。こうして皆さんと再会し、これまでの経験や思いを聞いたことをとても嬉しく思います。

コジャタエフ駐日カザフスタン大使が来会



イェルラン・パウダルベック・コジャタエフ駐日カザフスタン共和国大使は9月25日、FECの事務局を訪れ、松澤建FEC理事長と会談した一写真。今年4月に着任したコジャタエフ大使は、2016年から21年に続いて2度目の駐日大使としての勤務で、2度目の着任後でFECへの初訪問となった。当日はミルザティラエフ・アンヴァル参事官が同行した。

会談の冒頭、コジャタエフ大使は「FECは長年にわたり日本とカザフスタンの経済・人的交流の促進に貢献しており、両国関係をさらに発展させるうえで重要なパートナーである」と述べ、FECとの協力関係を一層深めていきたいとの意向を示した。大使はまた、今後の重点分野として再生可能エネルギー、鉱物資源の高付加価値化、スタートアップ支



援などを挙げ、「カザフスタンは中央アジアのハブとして日本企業に多くのビジネスチャンスを提供できる」と説明した。

会談には、FEC会員企業でカザフスタンでの事業展開に関心を持つサクラグローバルホールディング(株)および(株)Joblabの代表者らも同席し、現地での事業構想や人材育成の取り組みについてプレゼンテーションを行った。コジャタエフ



大使は両社の取り組みに強い関心を示し、「こうした日本企業の進出はカザフスタンの経済多角化に大きく寄与する」と述べ、今後の連携拡大に期待を寄せた。

これに対し松澤理事長は、「カザフスタンは豊富な資源と安定した経済基盤を持ち、日本にとって極めて重要なパートナーである。FECとしても両国の交流をさらに後押ししていきたい」と述べ

た。また、文化や人的交流を通じた相互理解の重要性にも触れ、「今後はカザフスタン大使館でFECが主催するフォーラムを開催したい」と提案した。

最後に、両者はカザフスタン大使館とFECが緊密に連携し、経済・文化両面での交流を一層活発化させていくことで一致し、和やかな雰囲気の中で会談を終えた。

「台湾有事シナリオと日本の安全保障」 政治・外交・防衛「三位一体」で抑止体制を

FECは9月18日、小原凡司（公財）笹川平和財団上席研究員を招き、「台湾有事シナリオと日本の安全保障」をテーマに第295回国際研究会をオンラインで開催した。松澤建FEC理事長の開会挨拶の後、小原氏が講演を行い、最後に質疑応答が行われた。

【講演要旨】

近年の防衛白書では、中国の軍事力が質量ともに拡大し、日本周辺海域において米国を除けば対抗可能な国は存在しないと明示されている。台湾有事はもはや仮説ではなく、「時間の問題」として議論される段階にある。

中国の台湾統一シナリオは4段階で構成され、まず「進んで圧迫」、次に「脅して封鎖」「壊して動けなくする」と進み、最終的に「縛ってコントロール」となる。軍事演習やミサイル発射によって心理的圧力を高め、続いて長射程ミサイルや無人機で防衛中枢を攻撃し、通信・防空網を麻痺させることで抵抗力を奪う構想である。上陸作戦は最終手段であり、中国にとって極めて高コストな行動である。ノルマンディーや硫黄島の戦訓が示すように、敵戦力が残存する状態での上陸は甚大な損耗を伴うからである。

今年の軍事パレードでは無人戦闘機、極超音速ミサイル、レーザー兵器、大型ロボットなどが登場し、AI主導の「知能化戦争」への転換を鮮明

に示した。これら兵器群は「機械対人間」「機械対機械」の戦闘を実現し、兵士の損耗を最小化する智能化戦争の象徴である。中国はAIや自律型兵器の導入を加速させ、教育・訓練コストを削減しつつ継戦能力を高めている。背景には、白紙革命などにも見られる「人的損害への社会的不寛容」がある。戦死者の増加は政権批判に直結し得るため、共産党は「人命を失わない戦争」を追求し続けている。

さらに中国はサイバー・宇宙・電子領域を統合した作戦体系の構築を進めている。昨年軍改編で「情報支援部隊」「軍事宇宙部隊」「サイバー空間部隊」が新設され、ネットワーク化された統合作戦の強化が図られている。しかし部隊旗制定の遅れや権限の不明確さなどから、内部調整の難航がうかがえる。これは、習近平政権下での権力集中の一方で、軍内部に抵抗や不安定要素が残ることを示しており、習近平主席による軍の掌握が必ずしも完全でないことを示唆する。

核戦力においても中国は「防衛的・先制不使用」を掲げながら、実際には甘粛省や内モンゴルで100基を超えるICBMサイロを建設している。弾頭数は約600発に達し、多弾頭化（MIRV化）による抑止力を強化中である。核・通常兵力の両面で米本土を攻撃可能であることを誇示し、米国の介入抑止

を図る一方、「安全維持のための最小限」という恣意的な解釈が可能な基準を用いて軍拡を正当化している。この姿勢は中国が掲げる「平和的手段による台湾統一」も、恣意的な解釈がされることを示唆している。空母「福建」は実戦配備の最終段階にあるが、カタパルト運用や艦載機パイロットの育成が課題であり、戦力としては未完成である。さらに新型爆撃機や原子力潜水艦も開発途上にあり、3本柱抑止力（陸・海・空）の確立には至っていない。

現在の中国軍の近代化は、「機械化、情報化、智能化の融合発展」という形で進められている。湾岸戦争を契機に米軍のネットワーク戦を模倣し、AIによる自律兵器の導入で戦争の自動化を進めている。だがこの動きは倫理的問題を伴い、AIが人間の判断を排して人間を殺傷することについて懸念も示されている。欧米ではLAWS（致死性自律兵器システム）の使用制限が議論されているが、中国は実用化に最も積極的である。

日本にとっての最大の教訓は、台湾有事を単なる地域紛争ではなく「情報・認知戦を含む包括的脅威」として認識することである。中国はディープフェイクやSNSボットを用いて世論を誘導し、国内外の分断を狙っている。これに対抗するため、日本は情報防衛



能力の強化、AI技術開発、サイバー防衛人材の育成を急がねばならない。また、日米同盟を基軸に豪州・インド・東南アジア諸国との多層的安全保障協力を深化させることが必要である。国内的にも、防衛産業基盤の強化や緊急時の国家意思決定プロセスの迅速化が求められる。

結論として、中国の戦略思想の本質は「大国との戦争は避け、劣勢な相手には力で臨む」という現実主義的構造にある。台湾統一「中華民族の偉大な復興」という国家理念の一部であり、一度掲げた目標は撤回されない。ゆえに日本は中国の軍事・情報行動を早期に察知する情報体制を整え、政治・外交・防衛の三位一体で抑止体制を構築すべきである。AIと無人化が進む新時代において、技術と人間の均衡を見失わず、国民的覚悟と制度的整備をもって平和を維持することが日本の安全保障の核心である。

「AI、認知領域戦と我が国の安全保障」 国民全体の「認知的防衛力」高める教育必要

FECは9月29日、苫米地英人カーネギーメロン大学博士（コグニティブリサーチラボ代表取締役CEO）を講師に迎え、「AI、認知領域戦と我が国の安全保障」をテーマに第296回国際研究会を開催した。松澤理事長の開会挨拶の後、苫米地氏が講演を行い、最後に質疑応答が行われた。

【講演要旨】

私は長年、AI研究と安全保障の双方に関わってきた。1980年代から人工知能の基礎研究を行い、2000年代後半からはサイバー分野に本格的に取り組んだ。13年以降は自衛隊関係者との協議を通じ、サイバー防衛体制の構想にも関与してきた。その経験から言えるのは、AIの進化が安全保障の構造そのものを変えつつあるということである。

本日、産経新聞の朝刊に拙著「自衛隊 認知戦軍 創設提案～戦略的影響のパラダイムシフト～」の広告が掲載された。本書は、ヨーロッパの学会向けに執筆した認知戦研究を基礎とし、NATOに提供したデータと英文原稿をもとに構成したものである。前書きを新たに加えた。今回は正確を期すため、一言一句全て自筆で執筆した。

これまでの戦争は、陸・海・空・宇宙・サイバーといった物理領域を中心に行われてきた。しかしAIの登場により、人間の思考や判断、つまり「心



の構造」そのものが戦略の対象になっている。私はこれを「認知領域戦」と呼ぶ。認知とは脳内で情報を処理し、意味づけ、判断を下す過程であり、その構造に影響を与える行為が認知戦である。

心理戦や情報戦が外部からの刺激による短期的な印象操作であるのに対し、認知戦は信念体系そのものを変える長期的かつ不可逆な働きかけである。SNSや生成AIの普及により、誰もが情報発信者となった結果、真偽の区別が難しい情報が大量に流通し、人々の認知を揺るがしている。こうした状況を放置すれば、社会全体の判断力が損なわれ、国家の意思決定にも影響を及ぼしかねない。

たとえば、生成AIで作られた偽情報にボットが反応し、一般利用者が無意識のうちにそれを拡散する構図がある。ボットファームと呼ばれる多数のAIを並列運用し、同一趣旨の映像や

文章を自動生成・自動投稿して情報を拡散する仕組みである。まず、生成AIがフェイクニュースや偽画像、偽情報を大量生産する。次に、別のAIがそれらの投稿に対し自動的に「いいね！」等の反応を大量付与する。作成担当のボットと拡散担当のボットは分業されており、偽情報は短時間で広範に拡散される。さらに、評価操作専用のボットが集中的に「いいね！」を積み上げる。ソーシャルメディアのアルゴリズムは一般に、検索エンジンのPageRankに類似し、人気や反応の多さを上位表示の主要なシグナルとして用いる構造である。その結果、敵対勢力が仕掛けた情報が、プラットフォーム事業者（GAFAMやX等）のランキング機能によって上位に押し上げられ、多数のユーザーに露出されるという逆説的な現象が生じるのである。本人の意図とは無関係に、外部勢力の情報操作を助けてしまう。このような仕

組みを断ち切るためには、単なるファクトチェックではなく、国民全体の「認知的防衛力」を高める教育と制度が必要である。

私は、サイバー戦を「電磁気学に基づく物理的な戦い」と定義している。それに対して認知戦は、初めて「非物理領域」を対象とする戦いであり、人間の心を直接の戦場とする。この発想は、物理的破壊を伴わずに目的を達成する「誰も死なない戦争」への転換を意味する。情報と認識を制する者が、実際の戦闘を経ずして戦略的優位を得る時代に入っている。

こうした新しい安全保障に対応するためには、軍事だけでなく、科学・心理・倫理の知見を統合しなければならない。私は、自衛隊の技術部門に加え、認知科学者、心理学者、精神科医などを含む「認知領域専門チーム」の創設が急務であると考えている。AIやサイバーの専門家だけでは、人間の心を守ることはできない。

AIは本来、人間を超えるものではなく、人間を理解し支えるものでなければならない。認知領域の安定を確保することこそ、真の安全保障であり、平和維持の基盤である。今後、日本はこの分野で主導的な役割を果たし、国際社会と協調しながら、人間の尊厳と理性を守る「知的安全保障」の構築を目指すべきであると考えます。

第295回国際研究会

小原凡司（公財）笹川平和財団上席研究員

第296回国際研究会

苫米地英人カーネギーメロン大学博士

「ニュージーランド・フォーラム」 信頼と友情に基づく二国間関係で協力を深化



FECは10月9日、ニュージーランド大使館のギャレス・ピジョン公使を迎え、第297回国際研究会（ニュージーランド・フォーラム）を同国料理レストラン「ワカヌイ・グリル・ダイニング パー・東京」にて開催した。冒頭、渡部賢一FEC会長が開会の挨拶を行い、その後、ピジョン公使によるプレゼンテーションが行われた。質疑応答を経て、参加者はニュージーランド料理を囲みながら懇談し、親交を深めた。

【講演要旨】

ニュージーランドは自由で開かれた社会を基盤とする民主主義国家であり、国際法の支配、人権の尊重、効果的な多国間主義を重視する国である。これらの理念は日本と共有する基本的価値であり、両国関係を長年支えてきた精神的基盤である。

日本人々々にとってのニュージーランドは、美しい自然やワイン、オールブラックス、羊、映画『ロード・オブ・ザ・リング』の舞台として知られるが、現代のわが国はそれだけにとどまらない。創造性と革新性に富み、活力ある国家へと変貌を遂げている。

宇宙、再生可能エネルギー、先端技術、クリエイティブ産業などが急成長している。宇宙企業ロケットラボは日本のシンスペクティブ社の衛星を打ち上げ、政府は2030年までに宇宙産業規模を倍増させる方針である。地熱、水素、核融合などの分野でも日本との協力を深め、脱炭素社会の実現に共に取り組んでいる。映画やデザイン、ファッション、音楽など文化産業も世界的に高く評価されており、創造力こそがニュージーランドの成長の原動力である。

第297回国際研究会

ニュージーランド大使館公使



る。

その根底には、創造性、協力、寛容、多様性、挑戦を恐れぬ精神といった国民的価値観がある。これらは1840年のワイタング条約に由来し、先住民マオリと英国王室の間で築かれた相互尊重とパートナーシップの精神が今日まで受け継がれている。マオリ語や文化の振興は今も国家政策の柱であり、多文化共生社会の基盤となっている。

また、男女平等と多様性の推進においても世界を先導してきた。93年に世界初の女性参政権を実現し、2022年には議会の女性比率が50%を超えた。総督や首相など、国家の主要職に女性が就任してきた歴史を持つ。さらにLGBTIQ+の権利保障にも積極的であり、03年に同性パートナー制度を導入、13年にはアジア・オセアニアで初めて同性婚を合法化した。こうした政策は、平等と多様性が社会と経済の力になるという信念の表れである。

これらの価値は外交政策にも反映されている。ニュージーランドは人権、女性と少女の権利、障害者の権利、あらゆる差別の撤廃を国際的優先課題として推進している。貿易政策でも、女性や先住民、中小企業が恩恵を受ける

包摂的で持続可能な形を重視している。多国間主義を堅持し、主権の平等、ルールの遵守、協調による課題解決を重視する姿勢は一貫している。

今日、世界は地政学的競争、気候変動、保護主義、民主主義の後退など多くの課題に直面している。ニュージーランドはこれを「ルールからパワーへ」「経済から安全保障へ」「効率から強靱さへ」という変化として捉え、法の支配と開かれた市場を守りつつ、包摂的で持続可能な成長を追求している。

この国際環境の中で、日本は最も信頼できるパートナーの一つである。日本はわが国にとって第6位の貿易相手国であり、CPTPPをはじめとする経済連携、脱炭素化、太平洋島嶼国支援などで緊密に協力している。インド太平洋の安定と繁栄、法の支配の維持など、両国は同じ目標を共有している。

首脳会談では戦略的協力パートナーシップの強化が確認され、エネルギー、科学技術、農業、健康、デジタル分野などで新たな連携が期待されている。両国関係を支えるのは、国民間の友情である。観光、教育、スポーツ、姉妹都市、文化交流などを通じ、日常



研究会で振る舞われた
ニュージーランド料理

の人と人との結びつきが信頼を育んでいる。

ニュージーランドは自然の美しさのみならず、創意と革新にあふれた国である。左側通行で日本人にも運転しやすく、日本語対応も進む。雄大な自然、ワイン、料理、アクティビティ、都市文化など、多彩な魅力を備えている。今後も日本との連携を一層強化し、自由で開かれたインド太平洋の実現に貢献していく決意である。信頼と友情に基づく二国間関係こそ、持続的な平和と繁栄を支える力である。両国が共有する価値を礎に、未来に向け協力を深化させていきたい。

常任理事会、2法人、1駐日大使の入会を承認

FECは9月9日、常任理事会を開催し、渡部賢一会長、小林光俊常任理事、大田原真美常任理事ら9人が出席した一写真。

開会宣言の後、定款に基づき渡部賢一会長が議長となり、議長の指名を受けた松澤建理事長が各議案について説明を行った。第1号議案「会員の入会承認の件」では、前回の常任理事会（7月15日開催）以降に入会申し込みのあった法人2社、駐日大使1人がそれぞれ法人会員、名誉会員として承認され

た。

また第2号議案「会計監査人の報酬等の額の決定の件」では、令和7年度会計監査人（Mooreみらい監査法人）の報酬等の額が承認された。続いて報告事項として、月次決算報告の件▷支払実施報告の件▷要人等を迎えての研究会等開催の件▷常勤理事報酬及び退職慰労金についての調査結果の件▷次回常任理事会開催期日等の件一についてそれぞれ説明を行った。



**ホームセキュリティは
ALSOK**

ALways Security OK 新潟総合警備保障株式会社 <https://www.ngtalsok.co.jp/>
サンキュー ツ ヨ イ ミ カ タ

ALSOK ☎0120-39-2413 (年中無休 24時間受付)

**地球はつづく、
化学でつなぐ!**

東亜合成

東ティモールビジネスフォーラムに参加



小方俊也FEC専務理事は9月26日、東ティモール民主共和国大使館ならびに元駐東ティモール大使で現在日本東ティモール協会会長の北原巖男氏の招待を受け、大阪・関西万博会場で行われた東ティモール石油資源省主催の東ティモールビジネスフォーラムに参加した。当フォーラムには、同国のフランススコ・ダ・コスタ・モンテイロ石油・鉱物資源大臣、ジョブ・プリテス・ドス・サントス ティモール・レステ地球科学研究所 (IGTL) 所長、アンドリュー・ジョン・バトラーSunda Energy CEOなどが参加してプレゼンテーションとパネルディスカッションを行った。日本からは経済産業省や大阪ガスなどの関係者が出席した。



東ティモールは2002年5月20日に独立した21世紀最初の独立国で、本年10月末にはASEAN正式メンバーに加盟する見通しである。同国の現在の国家収入の多くは海底油田・ガス田からの収益によるものだが、バユウダングガス田の枯渇やオーストラ

リアとの海洋境界線などの課題はありながら、当フォーラムではグレーター・サンライズ (Greater Sunrise) ガス田の経済的可能性、採掘停止中のバユウダングガス田について「バユウダング2.0」構想を紹介し、CO₂貯蔵施設としての活用可能性などが提示され日本企業に対



モンテイロ石油・鉱物資源大臣 (中央)と北原元東ティモール大使 (右)、小方FEC専務理事

し資源開発やエネルギー政策への協力や投資を呼びかけた。当フォーラムは、東ティモールが資源国としての地位を国際的に確立し、日本との経済連携を強化するための重要な外交・経済イベントであった。

会員紹介 銀座高須クリニック

美容医療を通じて 日本の美と信頼を世界へ

高須クリニックは1976年の創立以来、日本の美容医療業界を牽引し、確かな技術と誠実な診療によって、国内外から高い信頼をいただいております。中でも銀座高須クリニックは、世界各国の患者様をお迎えする美容医療の中心拠点として、安心と品格を備えた医療の提供に努めております。

近年、美容医療に加えて再生医療やがん免疫細胞治療への関心が急速に高まっています。当院でもこの分野にいち早く取り組み、特に幹細胞治療や免疫細胞療法など、最先端の医療技術を導入することで、患者様一人ひとりに最適な医療をお届けしています。安全性と品質を重視し、国内外の皆様が安心して受診いただける環境づくりに力を注いでいます。

銀座高須クリニック

また、銀座高須クリニックでは英語・中国語に対応できるスタッフを配置し、各国の政財界関係者、経営者、文化人など、多くの海外VIPの方々にもご来院いただいております。日本ならではの「安心感」と「おもてなしの心」、そして「誠実な医療技術」で、国境を越えた信頼関係の構築を目指しています。

私たちは、FECが掲げる「国際交流と相互理解の促進」という理念に深く共感し、参加させていただいております。美容医療や再生医療を通じた国や文化を超えた信頼の構築は、FECの目指す方向性とも重なり、私たちの使命とも通じ



〈法人概要〉
名 称：医療法人社団福祉会 高須クリニック銀座院
代 表 者：銀座高須クリニック 院長 高須英津子
所 在 地：東京都中央区銀座1丁目8-19
ONE GINZA 11F
電話番号：03-6228-6887
ホームページ：https://www.takasu.co.jp

るものと感じております。

医療現場で心を込めて提供する技術とおもてなしが、海外の方々にとって日本の魅力を実感いただくきっかけとなれば、大変光栄です。

ご関心をお持ちの方がいらっしゃいましたら、ぜひお気軽にご紹介・お問い合わせいただけますと幸いです。



落ち着いた個室で行う、安心感のあるカウンセリング空間



銀座中央通りを望むラグジュアリーな待合室。BOX型ソファで隣席の視線を遮り、上質な寛ぎの空間に



清潔感とプライバシーを重視した施術室。静寂と安心に包まれた特別な空間



経験豊富なドクターによる、丁寧で自然な仕上がりの施術



一流ホテルの接遇を学んだ、品格あるおもてなしを提供する受付スタッフ

医療の進歩に貢献するサクラグループ

〈皆様をウィルスから守る!〉 〈がんの迅速診断に!〉

サクラ精機株式会社 <http://www.sakurajp.com/>

サクラファインテックジャパン株式会社 <http://www.sakura-finetek.com/>

サクラグローバルホールディング株式会社 <http://www.sakuraghc.com/> TEL.03-3270-1666

東京

センユウグループ

TOKYO EAST SIDE HOTEL KAIE

東京イーストサイド ホテル権会 TEL.03-3699-1403
東京都江東区潮見 2-8-11 <https://www.hotelkaie.jp>

豊洲 潮見

JR 京葉線潮見駅 東口前

東京駅から7分。舞浜へは9分。
観光地へのアクセス便利な好立地!

舞浜

FEC 会員懇親会のご案内

11月21日 帝国ホテルで開催

会員の皆様の日頃のご支援に感謝し、2019年以来6年ぶりとなるFEC会員懇親会を下記の通り開催いたします。

日 時：11月21日（金）18時30分～20時30分（開場18時）

会 場：帝国ホテル本館 中2階「光の間」

当日は、2015年にノーベル生理学・医学賞を受賞した大村智北里大学特別栄誉教授や船越健裕外務事務次官を来賓としてお迎えするほか、外交団長のマンリオ・カデロ駐日サンマリノ共和国大使をはじめ、FECの名誉会員でもある各国の駐日大使にもご出席いただく予定です。

また、日本の伝統的な大衆文化を代表する「江戸太神楽」の演舞も予定しています。

会員の皆様には別途ご招待状をお送りしていますので、ご参加をお待ちしています。

ご不明な点がございましたら、事務局までお気軽にお問い合わせください。



2018年の会員懇親会の様子



歓談する会員ら＝2019年



（左から）カデロ駐日サンマリノ大使、金川会長、松澤理事長
＝2019年

【江戸太神楽】東京都指定無形民俗文化財

太神楽は、獅子舞と曲芸を組み合わせた、日本の伝統的な芸能です。その起源は平安時代にさかのぼり、江戸時代に最盛期を迎えました。かつては神社の使者として全国を巡り、神々の名のもとに人々へ祝福を授け、護符を配るという重要な役割を担っていました。

太神楽の主要な流派のひとつに、「熱田派 丸一」があります。

この流派は17世紀以来、江戸（現在の東京）においても活動を続け、悪を祓い、幸運を招く儀式として人々を魅了してきました。



丸一仙翁社中獅子舞



2018年、江戸太神楽の会



9枚輪の組取り

FEC 活動日誌

今後の催しのご案内

◆11月26日（水） 14時～16時
第126回ロシア研究会

講 師：袴田茂樹青山学院大学名誉教授

テーマ：世界秩序を崩したロシアと中東
会 場：如水会館

◆12月4日（木） 14時～16時
第50回米国研究会

講 師：渡部恒雄笹川平和財団上席フェロー

テーマ：トランプが変える世界と日本の戦略

会 場：国際文化会館

◆12月11日（木） 14時～15時30分

詳細、最新情報は本協会ホームページ（<https://www.fec-ais.com>）をご覧ください。事務局（電話03-3433-1122）にお問い合わせ下さい。いずれも定員に達し次第締め切りとさせていただきますので予めご了承下さい。

第95回アセアン研究会

講 師：山田滝雄外務省アジア・ゼロエミッション共同体（AZEC）担当大使

テーマ：アジアの脱炭素化と日本のリーダーシップ～AZECを通じた地域協力の展望～

会 場：オンライン



100年の歴史を紡ぐカクテル

1924年に誕生した帝国ホテル初のオリジナルカクテル「マウント フジ」をご堪能ください。



帝国ホテル